九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼 : ナオサリの事例を中心に

中別府, 温和

https://doi.org/10.15017/2328574

出版情報：哲學年報. 43, pp.91-109, 1984-02-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「ゾロアスター教における聖なる火と清浄儀礼」

——ナオサリの事例を中心に——

中別府　温　和

ゾロアスター教の聖なる火は，それらが聖火殿（Dar-i-Mihr；Āgīārī）に於て維持されていること，更にそれらが一定の資格を有する祭司のみによって世話されていることで世俗から分離させられている。本稿は聖なる火を維持している祭司に義務づけられている資格を考察することを通して，ゾロアスター教徒の聖なる火に関する思考様式の一面を理解し，そうすることによってゾロアスター教の事物把握様式の理解に接近して行こうとする。そこで先ず聖火殿の構造の概略を示し，聖火殿内でのゾロアスター教徒の宗教的行為に言及し，そこに於て聖なる火が世俗から分離している様態を観察した後に祭司の資格に関する記述を行なう。ゾロアスター教徒の祈りの対象である火に関して，火の内在的性格——例えばエネルギー，光等——からのみ考察を進めていくのではなく，祈りの対象である火がゾロアスター教徒の内面においてどのように意識され位置づけられているかという方向から考察を試みようとする。その際，インドの西北部沿岸に位置しているナオサリ（Navsari 人口約8,000人。ゾロアスター教徒であるパーシーが約 2,000 人を占める）におけるフィールドワークを通して得た資料を中心に記述していく。尚，聖火殿の構造については Dasturji Firoze M. Kotwal，宗教儀礼については Dasturji Meherji Rana に資料を提供していただいた。

聖なる火が保たれている聖火殿は，その中にゾロアスターの肖像，太陽，月星，牛，フラワシ（Fravaši）[1]，ザクロ，ナツメヤシ等のゾロアスター教にとっ

て重要なシンボル群を含みつゝ，他方では祭司によって伝統的宗教儀礼が行なわれ，共同の祝祭が催される聖なる空間である。その規模に異なりは見られるものの，構造は殆んど同じである。ここでナオサリの聖火殿（Ātaš Bahrām と称されている）を一例として取り上げていく。敷地の広さは約43m四方，一階建。聖火殿の門をくぐると庭（約８m四方）があり，ここにザクロ，ナツメヤシと花々が植えてある。ザクロとナツメヤシはヤスナ（Yasna）[2]の儀礼に使用される。アッシリア風の数本の柱に支えられた上方の壁には，太陽とフラワシと火を表わすシンボルが刻まれている。とりわけフラワシはナオサリの聖火殿全てに描かれている。入口には聖火殿の成立についての歴史がグジャラーティ（Gujarat）で記してある。聖火殿の中に入ると大理石造りの壁，上方にシャンデリアが吊されている。そこにゾロアスターの肖像（高さ 2.7m）と著名な祭司，平信徒の肖像が掲げてある。ゾロアスターの肖像は新年，ゾロアスターの誕生日（Khordād Sal、１月６日），その他の祝祭日にはゾロアスター教徒によって花で飾られる。その肖像に一礼をし，それに触れる。その奥に聖火壇（Gumbad，５m×５m，天井の高さ８m）[3]を囲む祈りの部屋（一方は５m×５m，他方は５m×４m）が展開する。聖火壇への出入口は一つで，火の世話をする祭司のみが出入りを許される。その一つの出入口を除く他の三つの壁に窓が設けられ，真ちゅうの格子が付されている。この窓越しにパーシーは火を見つつ祈る。敷居，窓台には銀製の花輪模様が描かれ，それぞれ６枚の葉を持ち，ゾロアスター，権標，太陽，月，星，牛が刻んである。聖火壇の出入口に２，３枚の銀板が据え付けられ，ゾロアスターの姿や聖火炉やアヴェスタの祈りが刻んである。聖火壇の真中に４脚の聖火台（Ātaš Xˇān）に支えられた聖火炉（Āfringānyu）があり，そこで聖なる火は絶えず燃え続けている。祈りの部屋ではゾロアスター教徒は必ず頭部を帽子やスカーフで被い，履物は脱ぐ。両手を胸の前で合わせ，頭を垂れ，聖火壇の出入口の前に立ち火に面す。聖火壇の出入口の敷居近くには丸い盆と杓が置いてある。跪き，ビャクダンあるいは金銭を盆の上に置き（čamačni-ašodād），杓に盛ってある聖なる火の灰に触れ，額に付着させる。額を敷居に接触させ，鼻を床に触れさせつゝ左右に

動かす。立ち上がり，火に面しつゝ２，３歩後退する。そしてこの後，格子窓越しに火を見つつ火に面しながら祈る。

聖火殿には非ゾロアスター教徒，死体運搬人（Nasāsālār），月経中の婦女子は入ることができない。これらを除くゾロアスター教徒も身体を浄め（pādyāb kusti）[4]，頭部を帽子，スカーフで被って入る。聖なる火に対しては接触の禁止が加えられている。聖なる火は三方を壁によって区切られた聖火壇内に保たれ，言葉によって自由に交通し合える対象ではない。息や唾がかかっても許されない。聖なる火の世話をする祭司といえども直接接触することはできず，口許を白い布で被い，両手には白い布か手袋を着用し，杓（čamač）等の儀礼用の道具を用いて間接的に接触していく。服装も白色を条件とした一定の様式に従うべきである。聖なる火には世俗的時間と異たった時刻（Gāh）に香木が加えられる（bui の儀礼）[5]。空間的だけでなく時間的にも世俗から分離している。一方，聖なる火へは積極的に供物（ビャクダン，金銭等）がなされ，聖なる火への祈りが唱えられる。ナオサリでは家畜（gospand）[6]の肉が聖なる火に捧げられていた（Zur，Zor）[7]事実がある。ゾロアスター教徒の聖なる火への祈りに於ては，聖なる火は「アフラ・マズダの子」（āθrōahurahe mazdā puθra）として人格化され（ĀN.４，５，６，７，８，10，12，18），供犠と祈りに値し，供物を以って接せられるべき存在とされている（ĀN.７，８，14，15）。供物を以て近づく人に対しては火は生命，知恵，子孫，活動力，勇気等を恵む（ĀN.10，11）。聖なる火は永遠的存在であり，人をして善き報い，善き名声と魂の永き平静に与らしめる（ĀN.13）。このように積極的な意味に於ても供物，祈りの行為を通して，聖なる火は世俗から分離させられている。

聖なる火は昼夜絶えず燃え続けている。聖火壇に保たれる火は決して絶やされてはならない。他の聖なる火と混ぜ合わされたり，また火が二つ以上に分かたれたりすることは許されない。一日に５回，ガー（Gāh）の始め毎に香木が燃料として加えられ，ガー以外には祈りに来たゾロアスター教徒が捧げた香木が必要に応じて与えられる。聖なる火，聖火殿は個人，一族，地域を限定したゾロアスター教徒共同体を単位として建てられ維持されている[8]。聖なる火，聖

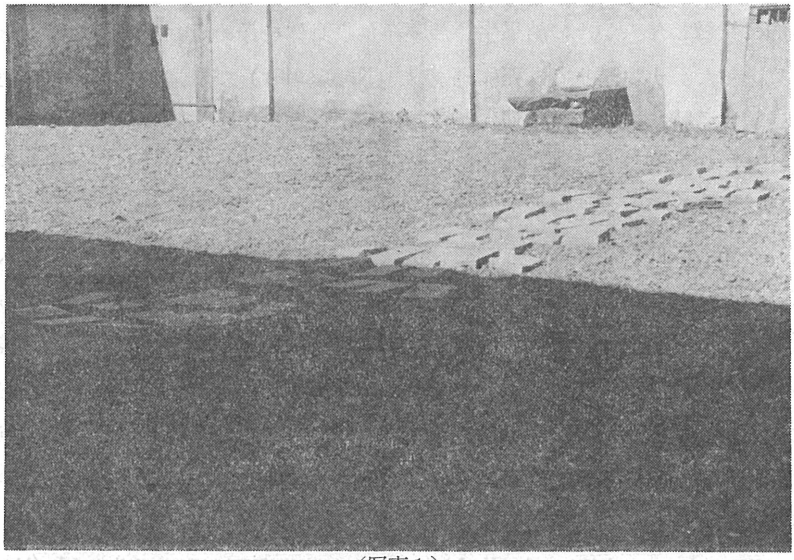
火殿を維持する主体は特定の祭司に聖なる火の維持と聖火殿内で行なわれるべき一定の経済的報酬を与えている。祭司はパンターク（panthāk）[9]によって平信徒と結びつき，経済的報酬のもとで誕生，入信式（Navjot），婚姻，葬送に関する儀礼，死者の霊魂のための儀礼，祝祭（Jašan や Gāhambār）[10]における儀礼を行なう。ゾロアスター教徒の生活はパンタークを通して祭司及び聖火殿との深いつながりを保ちながら展開している。このように祭司は聖なる火を実際に維持して行く上でも，また聖火殿内に於てあるいはゾロアスター教徒の家に於て多くの伝統的宗教儀礼を行なって行く上でも最も重要な役割を担っている。従ってゾロアスター教に関する古い姿をより多く引き継ぎ，それらに修正を加えて来た一つの階層である[11]。一定の儀礼を経て男子のみが祭司になって行くのであるが，祭司の中でも聖なる火の世話をする祭司は特定の資格を得た者でなければならない。ここで，その特定の資格について論じることにより，ゾロアスター教徒の聖なる火及び祭司に関する思考様式の一面を検討し，その結果としてゾロアスター教徒の信仰の様態の理解に接近して行こうとする。

聖なる火の世話をする祭司は二人一組でこれを行なうが，必ずバラシュヌーム（Barašnom）の儀礼を経ていなければならない。これは古い儀礼でアヴェスタ（Avesta）の中のヴィデーヴダード（Vidēvdād）に於て中心的な位置を占めているものの一つである。今日ナオサリでも慣行されているがその様式に若干の相違が見られる[12]。両者の異なりについての論述は別の観点から必要とされることであり，ここではそれらに言及することなくナオサリに於けるバラシュヌームについて詳述する。

バラシュヌームは身体を浄める儀礼である。聖火殿に付設しているバラシュヌームのための場所（Barašnom-gāh，約15～20m四方。図参照）に於いて，昼間に，しかも主として乾季に行なわれる。バラシュヌームを経ている祭司二人が一組となって依頼人に対してこの儀礼を取り行なって行く。アヴェスタの中ではこの儀礼は何らかの意味で死体（Nasu，Nasa）[13]に接触した人に義務づけられていた。死体と直接に接触した人，死体と直接に，しかし意識的でなく偶然に接触した人，また死体と直接に接触した人と接触した人，云わば死体と間

接的に接触した人がその結果生じた不浄から身体を浄めるために行なうべきものであった。ナオサリでは死体運搬人（Nāsāsālār）が職業としての死体運搬を退職する時，あるいは長期にわたってその職業を中断する場合に行なう。祭司は祭司そのものの資格を得る際の必須の事としてこれを行ない，祭司の資格を与えられた後も特定の重要な儀礼（例えばヤスナ[14]，ヴェンディダード[15]等の儀礼）を司る条件としてこの儀礼を義務づけられている。平信徒はかつては入信式（Navjot）時にこの儀礼を経たと云われているが今日ではその形式によって行なわれてはいない[16]。これについてはナオサリにおけるバラシュヌームの儀礼の過程を記述した後に言及して行く。ここではバラシュヌームの本来の目的は死や死体から生じる不浄を忌避し，その不浄から身体を清浄に保つという点に存したことを確認することで足りるであろう。ナオサリに於て行なわれているバラシュヌームの儀礼の内容は以下の如くである。

バラシュヌームとクーブ（Xūb）[17]を経た二人の祭司が聖なる牛の尿（Nīrangdin）[18]，聖なる水（Āv）[19]，聖な火の灰（Bhasam）[20]，水さし2杯の水，金属製の器（Karasyō）2つ，ザクロの木の葉，9つの節を持つ棒（Navgar；一方には端にスプーンが結びつけられ，他方には端にクギが結びつけられている）2本をバラシュヌーム・ガーに運びパーウィ（Pāvi W）[21]の中に置く。祭司は身体を浄め（pādyāb kusti），白い布（padan）で口許を被う。一人の祭司が金属製の容器を浄め，その中に聖なる牛の尿と聖なる火の灰を少量入れる。更に水さしを浄め，その中に聖なる水を2，3滴注ぐ。聖なる水が水さしの中の水をも聖なるものにする。これを終えると祭司はパーウィ V で祈り（Ašem Vohū）[22]を唱え，聖なる水で身体を浄める。脱衣し，ターバン，口を被う白い布を取り去り，3つの石群（U）の上に置いた後，石の上で聖なる水によって身体を浄める。脱がれた服の上にも聖なる水が2，3滴ふりかけられる。引き続き祈り（Kusti の祈り）を唱えつゝ，服，ターバン，口を被う白い布を身につける。祭司は3つの石群（U）に行き，9つの節を持つ棒（端に金属製のクギが結びつけてある）を石の上に置き東に向って立つ。一定の様式に従って祈り（Ašem Vohu，Yaθa Ahu Vairyo[23]，Bāj[24]，Sarōš Bāj[25]）を唱えた後に，



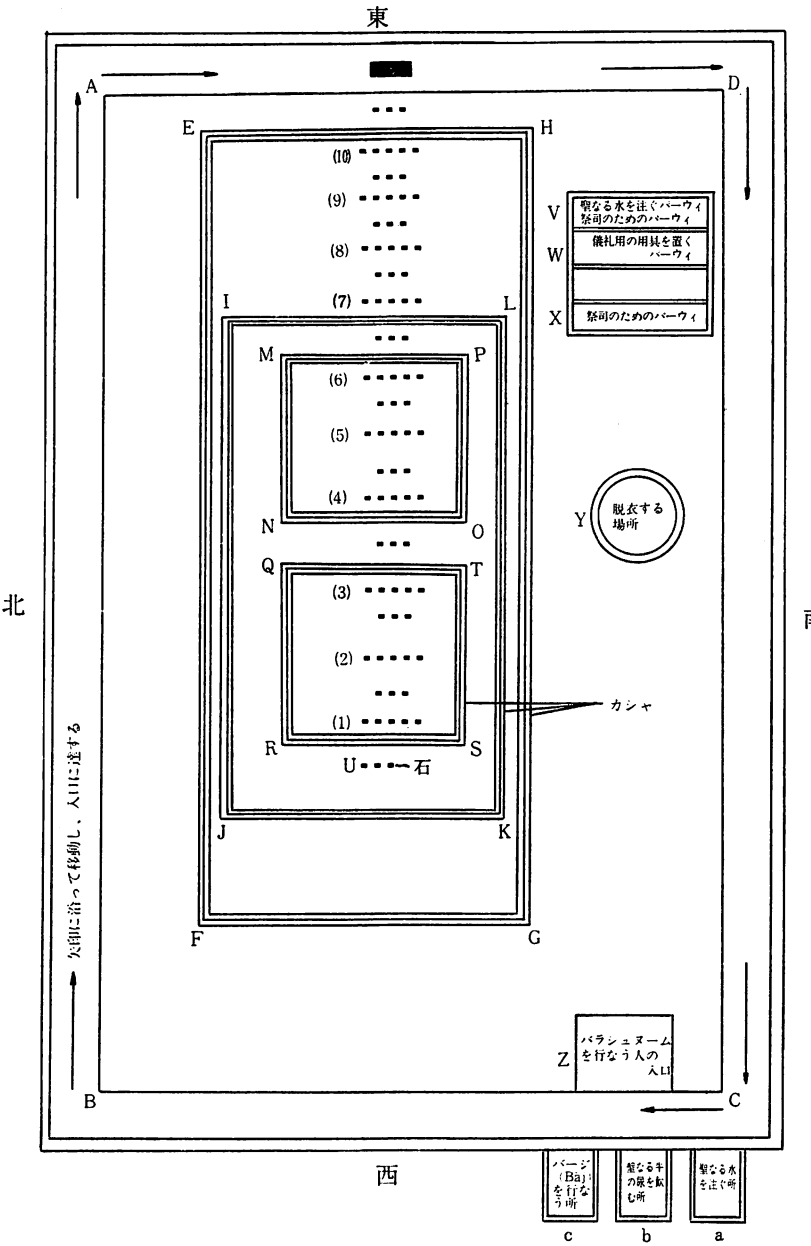
（写真１）

ナオサリのバラシュヌーム・ガー。石が三・五・三・五と交互に並べてある。最も東寄りに大きな石が一個加えられている。

（写真２）

バラシュヌームに出てくる犬と祭司。

バラシュヌーム・ガー (Barašnom—gāh) の略図



Ašem という言葉を大きな声で一度，小さな声で一度発し，図中Bから棒でカシャ（Kaša；線や浅い溝を画し他と異なる空間を形成すること[26]）を画く。Yaθa Ahu Vairyo の祈りを唱えながら，(1) B—A—D—C、(2) R—S—T—Q、(3) J—K—L—I、(4) F—G—H—E，(5) N—O—P—M の順序に画し，最後に祈り（Sarōs Bāj）を行なう。

バラシュヌームを受ける人（以下，依頼人と呼ぶ）は身体を浄め，清潔な服を着てパーウィ C に用意された敷物の上に座る。祈り（Bāj）を唱え，ざくろの木の葉を象徴的に食し，聖なる牛の尿を少量飲むと，ざん悔の祈り（Patet[27]）を行なう。その後面び祈り（Bāj と Ašem Vohū）を唱える。祭司はパーウィ V に引き下がり，もう一人の祭司は犬を連れてパーウィ X に控える。依頼人は「私はこの儀礼を善思（humata），善言（huxta），善行（hvaršta）を以て行ない，バラシュヌームの恩恵が身体に及ぶように，と願いつつこれを行ないます」と述べ，脱衣し右手で頭部を，左手で局部を覆って石群(1)に行き，しゃがむ。依頼人がカシャの中に入ったので祭司はパーウィ V から出て，右手にスプーン付きの棒，左手にクギ付きの棒を持ち，依頼人の入っているカシャの外から右手に持った棒を差し出し，依頼人の左手でスプーンの部分だけに触れさせる。次に頭部を覆っていた依頼人の右手の上に棒を置き，依頼人は自らの左手をスプーンの上に置く。祭司は祈り（Ašem Vohū，Sarōš Bāj）を唱え，Ašem という言葉を発して棒を依頼人の両手の間から抜き取ると，パーウィ V に引き返し，聖なる牛の尿を取り，依頼人にスプーンで少量ふりかけた後，その手にも注ぐ。依頼人はそれを身体全部にこすりつける。この過程は第一の石群(1)から第六の石群(6)まで各々3度ずつ繰り返えされる。それぞれの石群に於て犬が祭司によって依頼人の近くに連れて来られ，依頼人は左手で犬の左耳に触れる。第七の石群(7)では聖なる牛の尿を3度用いる代わりに砂を用いて18回身体を浄める。第八(8)，第九(9)，第十(10)の石群においては聖なる水を使用し3度身体を浄める。その他の儀礼の過程は同じであるが[28]，第九の石群と第十の石群では聖なる水で3度身体を浄める行為そのものがそれぞれ2回，3回と繰り返えされねばならない。従って犬を依頼人の近くに連れて来る。これ

までの儀礼を終えると，祭司は依頼人の着る服に聖なる水を少量落し，更に依頼人の左手（最後に犬に触れた左手）に注ぎパーウィ V に引き返えす。依頼人は服を着て，聖なる紐（kusti）を肩に掛け，その上からゆるやかな服（Jāmā）を身につけ，その右側のスカートの部分を左手で右肩に投げかける。祭司はパーウィ V から2本の棒を持って近寄り，スプーン付きの棒の方を依頼人の左手に当てると依頼人はその上に自分の右手を重ね，祈る（Baj）。その後，祭司の指示によって「不浄は浄められた，体全部が浄められた」，「魂は浄められた，犬は聖なり，祭司は聖なり」という言葉をそれぞれ3度ずつ繰り返えす。最後に棒が肩から離され，祭司が祈る（Nīrang- i kusti）。これでバラシュヌームの儀礼そのものは終了する。

依頼人はバラシュヌームの儀礼を終えた後，更に9日間は世俗生活に復帰できない。バラシュヌーム・ガーに閉じこもり，何人とも接触してはならない。食物は他人に給仕してもらい，食事中は特別の衣服と手袋を着用し，スプーンで食べる。食事は昼間に行ない，一日に最低5回（Gāh の時），祈らねばならない。木製の椅子，寝床は汚れを伝染させ易いので使用が禁止され，水は飲水を除いては使用されない。4日目に依頼人は身体を浄める。3つの石群を3つのカシャで囲み，その中に東に面して座る。バラシュヌームを終えた祭司が聖なる牛の尿と聖なる水を運び，パーウィを画してその中に置く。依頼人は右手を頭部に置き祈りを唱え（Sarōš Bāj と Kem nā Mazda）聖なる牛の尿を身体全部にこすりつける。依頼人の着る服には聖なる水が少量注がれ，依頼人も身体を浄める。服を身につけ，聖なる紐を肩に掛けたまま太陽に向って祈り（Bāj），そして聖なる紐を腰に結ぶ。この浄めの儀礼（Navšu）はバラシュヌームを朝に始めていたならば4日目の朝に，午後に始めていた場合には4日目の午後に行なわねばならない。この浄めの儀礼を終えると依頼人は再びバラシューム・ガーに戻り7日目，10日目に第二，第三の浄めの儀礼を行なう。儀礼の過程は同じであるが，2回目には聖なる水を水さし2杯，3回目には水さし3杯が与えられる。

このバラシュヌームの儀礼はゾロアスター教においては古い時代のものであ

り，ヴィデーヴダードの中心を占める要素の一つである。また，ゾロアスター教徒の保持している清浄儀礼の中で最も質の高いものである。その本来の目的は死によって結果する不浄を忌避することであった。直接的であれ間接的であれ，意識的であれ偶然にであれ，死から結果する不浄に触れることは遠ざけねばならなかった。死体は不浄の主体であり，その不浄は伝染する。従ってその不浄は一定の儀礼を通して浄められる必要がある。そのために特定の場所が選択され，浄める力を有する人によって9日間にわたって清浄儀礼が行なわれる。特定の場所においては，パーウィやカシャが画され，不浄なものと浄なるものを隔絶する。不浄を浄めようとする人はアヴェスタの祈りを唱え，聖なる牛の尿，聖なる水で身体を繰り返えし浄める。聖なる牛の尿には不浄を浄める力が含まれると考えられている。ナオサリにおいては葬送の場面ではこの尿で死体を洗い，死体運搬入及び葬列に加わった人は手，足，顔を洗う。死体が家から鳥葬の塔に運ばれる時には死体の置いてあった場所，死体の運ばれる道に尿を少量ふりまく。ナーン（nāhn）と呼ばれる清浄儀礼ではこの尿は聖なる火の灰を混ぜて飯まれさえする。ナーンは入信式，婚姻，出産，死者の霊魂の供養等の場面で義務づけられている儀礼である。この儀礼は祭司が司るが，祭司はバラシュヌームとクーブを終えていなければならないこと，聖なる牛の尿と聖なる水と聖なる火の灰で身体を浄めること，ザクロの木の葉を食すること，神に罪を告白すること（patet）などバラシュヌームと重なる部分が多い。さて聖なる牛は白い牛である。白以外の色が混じると聖度が落ちると信じられている。白は不浄から最も遠い色だと言われている。死体悪魔にさらされている葬送においては死体は白い服で被われるべきだし，葬列に加わる人は全て白い服を身につける。祭司の服も白である。入信式以来身につけるべきとされる聖なるシャツ（sudra）と聖なる紐（kusti）も白である。聖火殿に付設されている井戸の水も段階を追って聖なるものにされ，聖なる火の灰と同様に浄める力があるとされる。犬は視ることで不浄を弱め，追い払う力を持つと信じられている。死体悪魔につかれないために死体は犬に見せられねばならないし，葬列を犬が導くのも死体から生じる不浄を追い払うためである。従って犬が死ぬと

犬が不浄を浄める力を持つがためにそれだけ激しく強く死体悪魔がつくと考えられている。正しく，信仰深くそれ故に清浄を不断に維持して生きる人(ašavan)が死んだ時と同じくらい強く死体悪魔がつくと言われている。

このようにゾロアスター教において特徴的な聖なる牛，聖なる火の灰，犬，ザクロ等のシンボルを含みつつ，バラシュヌームの儀礼は死体から結果する不浄を忌避し，またその不浄から身体を清浄に保つことを目的とするものであった。ナオサリにおいて死体運搬人がこの儀礼を行なうことはこのような思考様式の上に立っている。しかし一方では死体運搬人に関してはバラシュヌームの代わりにリマンと呼ばれる儀礼を行なう場合が多くなって来ている事実がある。リマンの儀礼はパーウィとカシャの様式においてバラシュヌームと若干異なりが見られるが，祭司はバラシュヌーム，クーブを経ていなければならないこと，聖なる牛の尿，聖なる水，聖なる火の灰，ザクロの木の葉，9つの節をもつ棒が使用されることについてはバラシュヌームと同じである。そして，リマンの儀礼が死体から生じる不浄に接触した人に対して行なわれるべきものへと適用されようになるにつれて，ナオサリにおいてはバラシュヌームの内容が変化した。換言すれば，バラシュヌームの捉え方がバラシュヌーム本来の目的とするところと異なってきたことを意味する。つまり祭司を職業としうる資格を得るために，更に祭司を職業とした後も特定の儀礼（paw-mahal）などを司るのに不可欠の条件としてこのバラシュヌームを行なうようになったことと，平信徒が祭司に依頼して生きている人のためにあるいは死んだ人のためにこれを行なってもらうようになったことである。先に述べたようにバラシュヌームの行なわれる場所はカシャやパーウィで画され他の空間と区別され，その範囲内で儀礼に用いられる用具も浄なるもの（pāv）にされる。そのような場所で清浄な道具を用いてバラシュヌームを司る祭司もまた清浄でなければならない。ヤスナ，ヴェンディダード，バージ等の聖火殿内で行なわれる儀礼を司る祭司はヨーズダートレガー（Yōzdāθragar，'purifier'）と呼ばれ，「清浄なものの中で最も清浄」（pāk-i pāk，'cleanest of the clean'）と考えられている。従って祭司には死体悪魔は最も激しくつこうとする（Vidēvdād Ⅶ. Ⅱ）

さもないと清浄である祭司を不浄ならしめることが不可能であるからである。清浄を保つ祭司の身体に傷があるのは望ましくない。傷は「アンラ・マイニュ（Aŋra Mainyu）によって付けられた印」であるからである。それ故に祭司がイニシエーション（注（11）参照）を受ける際には身体の傷について審査を経なければならない。祭司は清浄でないものと対決し，これを克服していく人である。祭司がクラフストラガーン（Xrafstragan，'xrafstra-killer'；Mary Boyce，P．298）と称される理由である。xrafstra はアンラ・マイニュの創造した憎むべき害虫のことであり，サソリ，フクログモ，トカゲ，ヘビ，アリなどがこれに含まれる。クラフストラを殺すことはアンラ・マイニュの創造を統御することであり，従ってそれはアフラ・マズダの善き創造を保護し，それを増大させることであり極めて有徳の行為であると信じられている。

ゾロアスター教徒にとって第一に重要なことは身体的に，物理的に清浄であることである。身体，祭具を外部から浄める手段として聖なる牛の尿，聖なる火の灰，聖なる水，犬が用いられ，内部から浄める方法として聖なる牛の尿，聖なる火の灰を飲み，ザクロの木の葉を食し，罪の告白（patet）を行なうのである。しかもこれらのことが儀礼的に行なわれるときは，即ち全てのものが清浄（pāv）にされるときは「アフラマズダの喜びのために（xšnaoθra ahurahe mazdā）」と唱えられた後にアシェム・ヴォフーの祈り（aša を最も善きこととして讃える祈り，注㉒参照）が続く。清浄であることはアフラ・マズダとの関係において神聖さを，アシヤとの関連においては宇宙的秩序体系への一致を打ち立てる。ヤスナ48．5，ヴィデーブダード5．21；10．18に規定されているように，ゾロアスター教徒にとって「生まれて以来人間にとって最も大切なことは清浄（Yaozdā—）であること」となる。赤不浄の中にある婦女子は祈ることができない（zan-i bī- namaz 'a woman without prayer'）し，聖火殿の中に入ることも許されず，もちろん火を視ることも禁示される。死体運搬人も同様である。かれらは死体通搬人同志で通婚するのが原則とされている。

アンラ・マイニュはアフラ・マズダの善き創造に対し，悪しき創造をもって

対抗した。（ヴィーブダードⅠ）この世に存する病，悪臭，腐敗，災害等はアンラ・マイニュに属するものであるので，これらは遠ざけておかねばならない。そうするためにはアフラ・マズダの善き創造である空・水・大地・火・植物・動物（牛・犬・ニワトリなど）をも不浄ならしめず清浄に保つことが必要である。アンラ・マイニュによる不浄はいろいろな形で現実に存在しているので，ゾロアスター教徒はそれらの不浄に接することなしに生きていることはできない。だからこそ不断に身体をアンラ・マイニュの生み出す不浄から遠ざけ清浄に保つ一方，空・水・大地・火・植物・動物をも清浄に保つことは極めて重要である。不浄なものから不断に浄なるものを取り出す態度，そしてそのための儀礼がゾロアスター教において中心的な位置を占めている事実は一つには神話的かつ二元的な思考様式の上にこそ成り立ちうるとも考えられる。ナオサリにおいてゾロアスター教徒がバラシュヌームを祭司に依頼して行なってもらおうとするのはこの視点との関連で考察されるべきであろう。ゾロアスター教徒は祭司のもとへ行きバラシュヌームを記録する台帳に①バラシュヌームを行なう祭司の名前，②バラシュヌームを始める月（mah），日（rōj），③バラシュヌームが捧げられる故人の名前，④バラシュヌームが捧げられる人の名前，⑤バラシュヌームを祭司に依頼した本人の名前，⑥ゲティ・カリド（Geti-xarid）の儀礼を行なうか否か，⑦バラシュヌームを祭司に依頼した人の姓字，⑧バラシュヌームを祭司に依頼した人の family priest の名前，を記入しバラシュヌームを自分の代わりに祭司に行なってもらう。ここで注目すべきことは，このバラシュヌームが故人そして生きている人に捧げて行なわれる点であり，またゲティ・カリドの儀礼の目的とするところは，この世における諸々の罪や悪からの贖いを求めている点である。バラシュヌームという清浄儀礼を祭司に行なってもらうことを通して死者，あるいは生きている者がこの世において接触せざるを得なかった不浄を取り除き，そうすることを通して自らをも含めて不浄なものから救われたいとする態度である。ここにおいてバラシュヌームがその本来の目的である死や死体から結果する不浄を浄める手段としての儀礼のみにとどまらず，バラシュヌームを祭司に行なってもらう行為自体に価値が置か

れるようになってきている。不浄なものから絶えず浄なるものを取り出そうとする生活態度への価値づけの一面である。

ゾロアスター教の聖なる火は聖火殿内の聖火壇に保たれ，そのまわりはパーウィで囲まれている。この火に対しては接触の禁止があり赤不浄の中にある婦女子は聖火殿内に入れないし，死体運搬人もバラシュヌームを経てからでないと入ることを許されない。バラシュヌームを終えた祭司のみがこの火に香木を加えるために接近できる。しかしその際も口許を白い布で被い，息や唾がかからないようにし，手には白布か白い手袋をして杓を用いなければならない。香木を加える時刻はガーと呼ばれるゾロアスター教の時間単位に沿ってなされる。一方，火へは積極的に供物がなされるべきだし，それに対して祈りが唱えられる対象でもある。祈りの場面では火は「アフラマズダの子」として人格化されて呼びかけられている。このように消極的な意味での禁止と積極的な意味での供物，祈りを通して火は他のものと区別されている。

そのような存在である火の世話をする祭司が経なければならないバラシュヌームの儀礼は，ゾロアスター教において最も複雑で最も質の高い清浄儀礼である。従ってこの儀礼を不断に繰り返えしている祭司は最も不浄から遠い存在であると考えられている。このような祭司のみが聖なる火に接近することができる。身体を外部から聖なる牛の尿，聖なる火の灰，聖なる水，犬を手段として浄め，内部からは聖なる牛の尿と聖なる火の灰を飲み，ザクロの木の葉を食し，罪の告白を神に対して行なうことを通して浄めた祭司が二人で火に香木を加え，絶やすことなく燃やし続けている。火に接近するためにはこのような意味で最も高い清浄を外面的にも内面的にも保っていることが条件となっている。既に述べたように，バラシュヌームは死や死体から結果し，伝染する不浄を取り除く儀礼であったが，ナオサリにおいてはその本来の目的以外に最も高い清浄を得る目的のために祭司によって，あるいは祭司以外のゾロアスター教徒が祭司に依頼して行なわれるようになってきている。しかもそこには死者の供養のためにという視点と，この世における諸々の罪や悪への贖いがゲティ・カリドの儀礼を通して意図されていた。ここに不断に不浄から浄を取り出し，

清浄を保つことへの価値づけの一面が神話的かつ二元的思考様式を背景にして存在していると考えられるのである。このような方向からゾロアスターにおける「生まれて以来人間にとって最も大切なことは清浄（Yaozdā—）であること」の意味について更に検討を進めていかねばならない。

注

(1) ゾロアスター教に於て全ての善きものの内に存在し，そのものを生長せしめる精神的実体である。これについては宗教研究257，pp. 93〜94 で言及した。

(2) 聖火殿内の特定の場所（Urwīsgāh）で行なわれるゾロアスター教における重要な儀礼（Pāwmahel）の一つである。聖なる火（Dādgāh）を前にして，金属製の容器一式（ālāt），聖なる水，ざくろ，ハオマ（Haoma），聖なるパン（Drōn），聖なる牛の毛（Varasjoji）を用いて行なう儀礼であるが，その中心はハマオをつぶして飲む行為にある。

(3) 壁には剣が掛けられ，隅には小さな鐘が吊され聖なる火にガーの始め毎に香木を加える儀礼の過程に於て祭司の一人が，悪思（dušmata），悪言（duzhuxta），悪行（duzvaršta）と発しながら3回ずつ9回ならす。

(4) ゾロアスター教に於ける清浄儀礼の中で最も簡単なものであり，それ故に最も日常的に行なわれている儀礼である。これについては哲学年報第42輯 pp. 47—48で言及した。

(5) 香木としてはビャクタン，シタン，バワル等の常緑喬木を乾燥して使用する。これを聖なる火に与える儀礼に関しては宗教研究257，pp. 97〜99に於て言及した。

(6) Av. gav, Pahl. gāw に相当し一般には牛を意味する。

(7) B. N Dhabhar, The Persian Rivayats of Hormazar Framarz, Bombay 1932 の pp. 69〜71を参照。「人の死後4日目の夜明け方に gospand の肉が Ātaš Bahrām に必ず捧げられねばならない。そうすれば火の栄光（Adar Xoreh）が činvat の橋の一端に於て（死者の魂の前に）輝き，その魂に対する裁き（affairs）は容易に行なわれるであろう。」（p. 70）「…もし gospand の肉が供犠されるならば，Ātaš Bahrām に zur として捧げられるならば，魂は činvat の橋を幸に渡り，火の栄光と他の Amšaspands は魂を援助し……。」（p. 77）

(8) これに関しては西日本宗教学雑誌第六号 pp. 33〜38，哲学年報第42輯 pp. 34〜36，宗教研究257 pp. 84〜88を参照。

(9) パンタークは小さいもので10世帯，大きいもので100〜200世帯にいたる。聖火殿は約10〜15のパンタークの上に成立している。パンタークは本来は一群の祭司が宗教儀礼を行ない得る権利を主張する地理的範囲を意味した。宗教研究257 pp. 100〜

101，注(18)参照。

(10) この祝祭については宗教研究257 pp. 92〜94に於いて言及した。

(11) ゾロアスター教に於ては祭司は世襲制で男子が継承して行く。祭司になり得る資格は5世代以内に限定される。即ち祭司Aの息子B，孫C，曾孫Dは祭司を職業としなくてもDの息子Eは本人の希望次第で祭司になれる。祭司になるにはそのためのイニシエーションを受けねばならない。バラシュヌームを2回〔1回目は自分自身の身体を浄めるために（tan-pāk），2回目は自分以外の人のために（Nīyat）行なう〕済ませると，祭司二人（既にバラシュヌームを終えている）が6日間ヤスナの儀礼を行なう（Gewra)。この間中，祭司の資格を得ようとしている人は一日に5回，ガー毎に祈り，非ゾロアスター教徒との接触を避ける。6日目に白い服（Jāmā）と白いターバンを身につけ，左手にショール，右手に矛（gurz，牛の頭部を小さく型どって40〜50㎝の棒に付けたもの）を携える。祭司長，祭司，親戚と共に朝に聖火殿まで行列を組む。聖火殿の中で（Yazašna-gah)，ヤスナの儀礼が行なわれる。祭司になろうとしている人は脱衣し，身体を浄める（pādyāb kusti)，白い布（padan）で口許を覆うと，集まった祭司と親戚（Anjuman）の面前で祭司になるだけの資質があるかどうかが審査され可否が決定される。そこで容認が得られるとヤスナの儀礼を祭司の助手として司る義務がある。午後に Bāj，食後に Āfringān を行なう。これを4日間繰り返えすと Herbad の資格を得る。この儀礼を Nāvar と呼ぶが，これを終えた人が更にバラシュヌームを終え，クーブを経てヤスナ，ヴェンディダードの儀礼を二日にわたって行なうと Martab の儀礼を終了したことになる。従ってゾロアスター教に於ける全ての儀礼を司ることが可能である。

(12) ヴィデーヴダードの場合は植物は少なく，しかも人や家畜の足を踏み入れない乾燥した清潔な場所に於て9つの穴（maga）を設け，浄めの儀礼を行ない得る人に依頼して行なわれねばならない，とする。浄めの方法は死体への接触の仕方によって異なり，手段としては牛の尿，水を用いる。今日のバラシュヌームとの相違は場所，穴，手段について存在する。

(13) ゾロアスター教に於て Nasa は死あるいは死体に関する観念で，死や死体によって結果する不浄，汚れとの連関で捉えられている。ゾロアスター教徒はこれを (1) hixra（乾いた Nasu）と(2) Nasu（湿った Nasu）に分類し，hixra には切り取られた髪，爪，死体から得られた骨が含まれ，Nasu には血，唾，膿汁，死体が含まれる。

(14) 聖火殿内の特定の場所（Urwīsgāh）で行なわれるゾロアスター教に於ける重要な儀礼（Pāw mahel）の一つである。聖なる火（Dādgāh）を前にして，金属製の容器一式（alāt），聖なる水，ザクロ，ハオマ（Hōm)，聖なるパン（Drōn)，

聖なる牛の毛（Varasyoji）を用いて行なう儀礼であるが中心はハオマをつぶして飲む行為である。

(15) この儀礼は全ての悪の精神，不浄に導く力，精神的なもの物質的なものを腐敗させる力に対抗することを中心とするものである。バラシュヌームを終え，クーブを経た祭司二人によって悪の力が強くなる真夜中に聖火殿内で行なわれる。

(16) B. N Dhabhar の Hormazyar Framarz pp. 388-389 には産後の婦女子，14才と3ケ月を迎えた男女がバラシュヌームを受けるべきことへの言及がある。

(17) クーブには（大）クーブと小クーブがある。（大）クーブはバラシュヌームを終えた直後（10日目あるいは11日目に）mino nāvar のためにヤスナの儀礼を行なうもので，この儀礼においてそれを司った方の祭司（zoti）が(大)クーブの 'amal を得る。この 'amal は「聖なる力」であり，その威力はガーに従って数えて3日間続く。一方 panj-tay（あるいは panč-tai）のバージを終えると小クーブの 'amal を得る。この 'amal の威力はガーに従って一日間である。

(18) ゾロアスター教の聖火殿には，これに付設された特定の場所でワラスヨジ（varaˢyoji ゾロアスター教徒は -ji という接尾辞を付してこの牛を人格化している）と呼ばれる白い雄牛を飼っている。この中の尿は gōmēz と呼ばれるが，この尿が一定の儀礼を経て聖別されると nīrang と称される。バラシュヌームを終えた二人の祭司がクーブを経てゲウラ（gewra，6日間連続してヤスナの儀礼を行なうこと）の儀礼を済まし，祈り（Bāj）を唱え，聖なるパン（Drōn）を食し（ham-kalam），金属製の水さし2つと金属製の輪（varasni viti, varasyoji の毛が輪に巻きつけてある）をパーウにする。尿を取る作業は日没前に終了しなければならない。varasyoji とその他の牛から集められた尿が一つの容器に保たれている。この容器を前にして午後にヤスナ，真夜中にヴェンディダードの儀礼を行なうと尿は聖別される。

(19) ゾロアスター教においては対象が先ず聖なる火の灰で洗われるとそれは sāf になる。次に対象を3度聖火殿内の井戸の水で洗うとそれは pāk になる。パーウィの中に保たれている対象を pāk になった容器で3度水洗いをし pāk にし，更に3度水洗いしたところで pāv になる。pāv にされたものに保たれている水が聖なる水である。

(20) バラシュヌームを終えクーブを経た祭司二人が真夜中から夜明けまでの間（Ušahin gāh）に聖なる火の前に行く。金属製の盆（xumuči）金属製の杓（čamač）2つ，白いリネン一片をパーウ（pāv）にする。即ち，「アフラ・マズダの喜びのために」と唱え，Ašem Vohū を一度唱えて水洗いを3度繰り返えす。祭司は二人の間に紐（paiwand）を保ち，アフラ・マズダを讃えて（xšnuman）バージ（Bāj）を唱える。そして Ašem という言葉を発し，更に低い声でそれを繰り返

えす。祭司の一人が手袋（dastāneh）をつけ杓によって聖なる火の灰を取り，盆の上に置く。手袋を取り，手を洗い，両手をパーウにする。そして両手を火で乾かし灰をリネンに通す。こうして得られた灰は予めパーウにされた入れ物におさめられる。リネンに残った灰は聖なる火 Ātaš Dādgah の灰に混ぜられる。祭司は白い布を3つに折り，入れ物にかぶせ紐で3度巻き2回結び，パーウにされた場所に保つ。

(21) パーウィは浄なるものをその範囲内に保つために，また不浄なものをその中に保つために画される。パーウ（注19参照）にされた祭具（ālāt）を保つ場所であり，聖なる火も絶えずパーウィに囲まれている。聖なる牛から尿を取るとき牛はこれによって囲まれる。ゾロアスター教の中で最も重要と考えられている宗教儀礼(Pāw-mahal) はこの中でのみ行ない得る。そこでパーウィの中へはバラシュヌームを経た祭司だけが入ることを許される。その他の人が如何なる理由からであれパーウィに入るとパーウィはその機能を失なう。他方パーウィは死体を置く場所でもあり，死体に接触して汚れたとされる人を囲むために画される。

(22) アフナワル（Ahunavar）に次いで重要な祈りである。この祈りはアシャ（aša）を讃える祈りである。「アシャは善きもの，アシャは最も善きもの」と讃える。Mary Boyce (p. 27) は 'cosmic order' 'order of sacrifice' 'social order' 'moral order' を含む order(秩序体系）と解釈している。このアシャへの欠くべからざる一致を讃える祈りである。

(23) この祈りは Ahuna Vairya, あるいは Ahunvar としても知られ，最も古く最も重要な祈りとされている。ゾロアスター教徒として最初に身につけるべき祈りである。この祈りにはこれを唱えるものを悪から護るような力が含まれると考えられている。

(24) バージは(1)故人の年忌を祀ること，(2)供物類（聖なるパン，水，乳製品，ザクロ，卵），(3)宗教儀礼において発せられる押し殺したような声，(4)バージの儀礼を意味する。

(25) サローシュは人と神をつなぐ存在で昼夜人の魂を守るが特に夜にその保護は強まる。サローシュへの祈りが主に夜に唱えられる所以である。サローシュは悪魔（Dēv）や虚偽（Druj）から人を守る。4日目の明け方に死者の魂はチンワットの橋に赴き，裁きを受ける。その間サローシュは死者の魂を守る。このようなサローシュへの祈りである。

(26) カシャは不浄なものをその中に保つために，また浄なるものをその内に保つために画する。従ってカシャは死体を囲む場合と清浄儀礼の場合に用いられる。カシャを描く代わりに砂を盛って囲みその砂の上に指で小さく浅く溝を作っても良い。

(27) パテトは死んだ人のために祭司が行なう場合の他に，死体を鳥葬の塔に葬った直

後，死後3日間ガーの始め毎にサローシュの喜びのために4日目の朝の Uthamna の儀礼において，入信式のとき，清浄儀礼（Nāhn）においてザクロを食べ聖なる牛の尿を飲んだ後に行なう。

(28) 祈りの内容が異なる。第1の石群から第6の石群までは各石群に於て kəm-nā Mazdā が一度ずつ唱えられ，第7，第8の石群では Ahunvar, Yeŋhē hātam と kəm-nā Mazdā が一度唱えられ，第9第10の石群では3度くり返えされる。kəm-nā Mazdā「おお，マズダ，邪悪なもの（drəgvant-）が悪を及ぼそうとして我を捕えようとする時に，汝は汝の火と善思の他に誰れを我のための守護に，即ちその守護の営為によって正義が実現されるようなそのような守護になしたもうた。おお，アフラ，この教えを私の良心（daēna-）に対して宣言したまうや。」Yeŋhe hātam「生けるものの中でアシャに従って祈る対象としてより優れているのは何かをアフラ・マズダは知っておわします。それ故にそれらのものに対して我々は祈る。」（Mary Boyce, p. 262；伊藤義教 p. 81 参照）

(29) ゾロアスター教の宗教儀礼では世俗の時間単位とは異なる時間単位ガーを用いるので，儀礼を開始したガーをもってその儀礼によって得られる効果を数える。